第一湯、同來四三人、竟日情話、讀書寫字、或體倦則行觀皷瀧、登藥師堂、或遊地獄谷、而對望中之山林綠樹、經日愈浴愈快、不亦可乎、聞說、夫華清池雖爲諸湯之甲、而有凝脂之膩、傾國之汚、今余決不有之也、唯有吟風弄月、吾與點之氣象、亦庶幾哉、於是乎記、以告諸山靈、

元和七年辛酉之夏　　先生赴有馬作之

〔和漢三才圖會七十四 攝津〕温泉　在山口庄

風土記云、有馬郡有鹽原山、山間有鹽湯、因爲名矣、欽明天皇三年温泉始涌出、同九月帝行幸、後孝德亦行幸、見于日本紀、○中略

當山以有三輪神社、歌亦及之矣、聖武天皇朝、昆陽寺行基大僧正自寫如法經埋于泉底、作等身藥師石像、建一宇安置之、號常喜山温泉寺是也、○中略

堀川院承德元年、洪水崩山潰泉、以浚九十五年滅亡後鳥羽院建久二年、和州吉野僧仁西詣熊野而有瑞夢、隨神託到當山、浚温泉造十二坊舍再興之、既天正十七年、太閤秀吉公入湯以來、倍繁昌、今有二十坊、湯槽方一丈許、有二、南名一湯、北名二湯、大湯女、小湯女、各二十人、

〔有馬名所鑑〕湯本坊舍

仁西上人温湯再興の時、十二坊舍をたて、諸國より集る湯入の次第を、彼十二坊に奉行させられしと也、か、りければ、湯入のかたく跡先をあらそひ、或は湯壺より久しく出やらぬ者ありて、とく出よなどいひあがりて、鬪諍度々に及ければ、いづれの時よりか婢女をこしらへ、湯入の支配させつ、今に其わざ替事なし、されば湯壺よりをそくあがる者ありて、縱あらけなくいかり、わろ口いふにも、もとよりやさしきかたある女の事なれば、いらふ人もなくして、年々二六時中難波のよしあしに付ても、優々としていとめでたし、

〔有馬山温泉記〕此地温泉は、たゞ一所あり、其間板をもつてへだてゝ二所とす、南を一の湯とし、北